

図書館だより



今年の節分は2月3日ではなく2月2日でしたが、みなさん間違えることなく2日に豆まきや恵方巻を食べることはできたでしょうか。節分は「立春の前日」と定められていますが、今年は124年ぶりに立春が2月3日(国立天文台発表)となったため、節分の日も動いたということです。節分は2月3日に固定されていると思い込んでいましたが、そうではなかったのです。まだまだ日本の行事にも知らないことがたくさんありそうです。

さて、先月第164回芥川賞、直木賞の受賞作が発表されました。芥川賞を受賞したのは宇佐美りんさん『推し、燃ゆ』、直木賞を受賞したのは西條奈加さん『心淋し川』です。宇佐美さんは現在21歳の大学2年生で、史上3番目に若い芥川賞の受賞者となりました。西條さんも初ノミネートにして直木賞受賞という快挙でした。今後もふたりの作家さんの活躍に期待が高まります。



＊今の季節は立春 初候＊

449-3 『入門 日本の旧暦と七十二候』 洋泉社

立春、雨水、啓蟄、と日本には1年を24等分し、季節をあらわした名前をつけた二十四節気があります。太陽の高さが最も低くなる「冬至」や反対に最も高くなる「夏至」など、みなさんにも聞き馴染みのあるこれらもその中のひとつです。その二十四節気をさらに3つに分けたのが七十二候です。五日ごとに季節が変わっていくと思うと、その変化を感じながら日々を豊かに過ごせそうです。「東風解凍(はるかぜこおりとく)」、「鶯鶯睨睨(うぐいすなく)」、「魚上氷(うおこおりをいづる)」など名前も美しく、四季の風景を浮かべながらこの本を読んでいると心が癒されます。

＊推し活だって文学の題材になる＊

913.6-ウ 『推し、燃ゆ』 宇佐美りん 著 河出書房新社

なぜ『推し、炎上』ではないのでしょうか。今どきの言葉ならば、炎上のほうが馴染みます。それを“燃ゆ”としたところに、推しメンであるところのアイドル真幸くんの人としての意志の力を感じます。あかりにとっては推し活だけが自分に力を与えてくれます。何をやってもうまくいかない。探し物は見つからない。借りたものは忘れる。勉強だってみんなのようにできやしない。病めるときも健やかなるときも推しを推すことで強固な芯が体の中を一本貫いて、なんとかなる、と思えます。多くの人が共感できる推しのある生活。でも、その先には何が待っているのか。気になる人はぜひ。

チョコレートを知ってみよう

2月14日はバレンタインデー。毎年この時期になると、チョコレートのお菓子を目にする機会が増え、「チョコレートが食べたい」という欲望が芽生えませんか。いつも2月号ではチョコレートを使ったスイーツのレシピ本を紹介していましたが、今回はチョコレートの歴史やおいしさの秘密を知ることができる本をみなさんに紹介したいと思います。甘くて苦くて、口の中でとろけるチョコレートの世界を深く知ることで、その味わいをもっと広がるはず。

383-オ 『チョコレートの歴史物語』 サラ・モス / アレクサンダー・パデノック 著 原書房

私たちはチョコレートイコール甘くておいしいお菓子と認識していますが、人類がチョコレートと出会った初期の頃は貨幣としてカカオが使われていたり、薬として飲まれていたりという歴史もあったとみなさんは知っていたでしょうか。チョコレートが現代の形になるまでにどんな過程を経ているのかを読んでみると意外な発見がたくさん待っています。「女たちがチョコレートにやみつきになっている」という何世紀も前の記録があったり、ココアで有名な「バンホーテン」や高級チョコレートの先駆けである「ゴディバ」など馴染みのあるブランドも登場したりと、興味を惹かれる話題も多いです。

576-ウ 『チョコレートはなぜ美味しいのか』 上野 聡 著 集英社

チョコレートの魅力のひとつは口の中でとろけて、苦みと甘みのハーモニーが広がるのを楽しめるところではないでしょうか。実は私たちが今気軽に楽しめているこの幸せの裏には多くの職人や企業の努力があるのです。この本では食品の「食感」を微粒子の結晶構造から解析し、その理想形を追究する食品物理学の視点から、チョコレートのおいしさに迫ります。いろいろな試行錯誤を経て、おいしいチョコレートを作るためのノウハウが生み出されているのだと思うと、今以上にチョコレートが味わい深い食べ物になります。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

『流浪の月』が2020年本屋大賞に選ばれた風良ゆうさんの作品『滅びの前のシャングリラ』(913.6-ナ 中央公論新社)がまたも2021年本屋大賞にノミネートされました。「これからどんな物語が始まるんだろう…」と思わずにはいられない冒頭1行目。読み進めていくと、世界が1か月後に滅亡するという冗談みたいな真実が明らかになります。「そんなわけがない」と私が思ったのと同じように物語の中の人々も初めは半信半疑で過ごしていますが、次第に町中で暴動や略奪が起こり始めます。しかし、徐々に絶望の色が濃くなっていくこの物語を包んでいるのは温かなぬくもりです。それは主人公たちが「最悪だ」「死ぬのが怖い」と嘆きながらも、たくさんの幸せを手に入れながらカウントダウンの始まった人生を全力で生きているから。そのたくましい姿を見ていると束の間、世界の終わりが遠のいたような気さえしてきます。

地球滅亡の物語を読みながら、新年早々グッとくる本と出会い幸先がいいと思った1月でした。【今井】

♡ 図書館で出会う！～【ときめき】に出会う編～ ♡

バレンタインが近づくと何だか不思議と恋愛小説が読みたくなる、なんてことはありませんか。そんな恋のイメージが湧くイベントがある今月は、図書館でもドキドキした気持ちを楽しんでほしいと思い、

【ときめき】と出会う本を集めて、展示を行いました。

かっこいい彼にときめく本やときめく恋の本だけでなく、愛らしい動物やおいしそうなおスイーツにときめく本、意外なものにときめいちゃう本など幅広くときめく本を集めましたので、たくさんのときめきと出会う心弾ませてください。

◆展示本リスト◆

- 159-モ 『I Love Youの訳し方』 望月 竜馬 || 著 ゴリット・スミ || 絵 雷鳥社
→夏目漱石は「月が綺麗ですね」と訳した「I Love You」あなたならはどう訳して伝える？
- 484-テ 『ときめく貝殻図鑑』 寺本 沙也加 || 文 大作 晃一 || 写真 山と溪谷社
→不思議な形や模様、美しい色が人を惹きつける貝殻。宝石を眺めている心地になります。
- 489-マ 『手つなぎラッコ』 まりさ || 著 アスペクト
→ギュッと手をつなぐラッコたちの愛らしさ！思わず「可愛い！」と連呼してしまいます。
- 706-ハ 『思わぬ出会いに心ときめくパリの小さな美術館』 原田 マハ ほか || 著 新潮社
→5人のパリ通が教えてくれるとっておきの美術館。どの空間も個性にあふれ、魅力的。
- 913.6-ア 『植物図鑑』 有川 浩 || 著 幻冬舎
→植物オタクのイケメンを拾って(!?)しまったさやか。二人の生活に胸がくすぐられます。
- 913.6-ウ 『精霊の守り人』 上橋 菜穂子 || 著 偕成社
→生き様が格好いい女性に憧れます。孤立した皇子を守り戦うバルサは、素敵です。
- B914.6-オ-1 『ニューヨークのとけない魔法』 岡田 光世 || 著 文藝春秋
→人と人が触れ合う瞬間に満ちたNY。そこで暮らす自分を想像しながら読んでみて。
- B914.6-ラ 『ラブレターズ』 川上 未映子/村田 沙耶香 ほか || 著 文藝春秋
→他人の恋文を読むというドキドキ感。様々な表現で綴られた愛に触れてみませんか。

この中でも、いちおしなのは…

B914.6-ラ 『ラブレターズ』 川上 未映子 || 著 文藝春秋

豪華著名人が愛をしたためのラブレター。その宛先は恋人だけではなく。ある人は今は亡き愛猫に向けて、ある人は過去の自分に向けて、またある人はコンビニエンスストアに向けて、あふれる想いを書き綴っています。そこからは様々な愛の形と、書いた人の人生が伝わってきます。その人にしか書けない世界で一通だけの大切な手紙。それを読んでいるのだと思うと、胸がドキドキしてきます。読み終わった後、みなさんは誰に向けてラブレターを送りたいと思うでしょうか。

LIBRARY 新着本コーナーの気になる1冊 LIBRARY

491-ハ 『スマホ脳』 アンデシュ・ハンセン || 著 新潮社

現在、大人は1日に4時間をスマートフォン(以下スマホ)に費やしているということですが、進化し続ける社会に人間の身体は順応できていないと著者は言います。日々欠かさず触れているスマホが心身にどんな影響を与えているか。読むにつれ、スマホと私たちの脳の相性がよくないことに気づき、使い方を改めようと思えてきます。知らず知らずの内に増えていたストレスがこれで減らせるかもしれません。



596.6-7 『ジンジャースイーツ』 若林 曜子 || 著 立東舎



血行をよくし体を温める効果のあるしょうがは、寒い冬には積極的に摂りたい食材。そのしょうがを使ったスイーツのレシピ集。本を開くと、しょうがを使ったスイーツがこんなにあることに驚く人も多いのではないでしょうか。英国風ジンジャーブレッド、生姜入りのザクザクエッグタルト、生姜と黒糖コーヒーのマーブルレアチーズなど、味を知ってみたいスイーツがたくさん。色々作ってみたくになります。

913.6-7 『教室に並んだ背表紙』 相沢 沙呼 || 著 集英社

物語の舞台となるのは中学校の図書室。教室に行くのが苦しい、友だちとうまくいかない、自分の未来が思い描けない、など色々なものから逃げるようにやってきた少女たちは図書室でしおり先生と出会います。しおり先生はいつでも温かく彼女たちを迎え入れ、本と触れ合うきっかけを作ってくれます。本がすべてを解決してくれるわけではないけれど、彼女たちは図書室で自分を変えるための勇気を得ます。



B913.6-チ 『クローゼット』 千早 茜 || 著 新潮社



『わたしの仕事は眠り続ける洋服たちを当時の姿に戻すこと』約一万点が眠る服飾美術館で働く洋服修繕士の纏子。幼い頃から母親のクローゼットで洋服に魅せられていた纏子にとっては天職のような仕事だが、過去に受けた心の傷を癒せないまま不器用に生きていました。しかし、ある出会いが少しずつ纏子に変化をもたらしていきます。お気に入りの服を着た時のドキドキを思い出すような物語です。